

[会長講演]

多くの偉人を輩出した日本医科大学前身の済生学舎と
本学関連史料

弦間 昭彦

日本医科大学学長

日本医科大学は、創立140年を超える私立医科大学であります。その前身である済生学舎は、1876(明治9)年に創立されました。済生学舎は、明治初期の社会的変革期に、外国との交流の拡大によってコレラ、赤痢の流行が多発した当時の庶民の伝染病治療における西洋医の不足を補うために設立された私立医学校であります。その後、済生学舎は、1887(明治20)年には文部省令第5号により特別認可学校に指定され、多くの庶民の医療を支えた良医を育て、社会に貢献すると共に、野口英世をはじめ多くの偉人を輩出しました。私の会長講演では、済生学舎出身の代表的学者とその知友が社会に残した、現代および未来にも通じる幾多の教え・言葉を中心に、国立大学学長となった小口忠太と須藤憲三、また、世界的細菌学者の野口英世、そして北里柴三郎門下生の浅川範彦について、また今回の特別展示にて公開される本学関連史料を報告致します。

済生学舎出身の代表的学者

小口忠太は、県立愛知医科大学学長(現名古屋大学)を務めました。小口は、1891(明治24年)医術開業後期試験に合格し済生学舎を若干17歳で卒業しました。東京帝国大学の選科生として東京帝国大学の河本重次郎教授の指導を受け、1907(明治40)年先天停止性夜盲の一種の「小口病」(Oguchi disease)の発見者として世界に広く知られております。1929(昭和4)年国際眼科学会理事になり、1933(昭和8)年には帝国学士院賞を受けています。小口が常日頃述べた言葉は、Oguchi diseaseの記載が見られる教科書RETINA(Lippincott Williams & Wilkins 出版社発行)へ記載された如く「研究を行うなら100年後も教科書に載る研究をする」です。

須藤憲三は、旧制金沢医科大学学長を務めました。日本における糖尿病研究の先駆者であり、尿糖の定量法を確立しました。須藤は、1892(明治25)年医術開業試験に合格し、済生学舎を卒業しました。同年9月東京帝国大学の生理学教室の選科生となり、翌年1894(明治27)年6月東京帝大医学部隈川宗雄教授の助手となり、脂質代謝を研究し、「Pavy—隈川—須藤の糖及び脂肪の定量法」はつとに知られております。また、多忙の生活の中、須藤は母校の済生学舎で1901(明治34)年から生理学、医科学の講義を担当しました。須藤は、1912(明治45)年より3年間ドイツのベルリン大学カイザーウィルヘルム研究所に留学し、その留学中には金沢医学専門学校教授に任ぜられました。須藤は、1914(大正3)年に帰国後、同校に生化学教室を創設しました。1923(大正12)年に旧制金沢医科大学に昇格し、須藤は、翌年より同校の第二代学長に選任されました。その人となりについては、須藤は、実験装置を考案する能力に長けており、自らも「実験では世界一」と自負しておりました。

野口英世は、医術開業後期試験に合格し、1897(明治30)年に済生学舎を卒業しました。

旧伝染病研究所に残された野口の自筆履歴書には「明治29年11月4日ヨリ明治30年8月30日マデ済生学舎ニ医術ヲ学ブ」とあります。また『野口英世書簡集Ⅳ』には、「小生4月1日に済生学舎ニ入舎イタシ」とあります(野口より小林栄宛での書簡)。野口は約半年間済生学舎に在籍して最短期間で卒業しました。野口英世の筆記ノート「細菌学手記」には、「ヨウ微機生体、バクテリア」(細菌の分類)から始まり「コッホ氏のツベルクリン製法」まで書かれており、野口が世界的な細菌学者となったのは、済生学舎の細菌学非常勤講師であった坪井次郎がドイツで学んできた、最新の細菌学に関する講義を受け知識を得ていたためと思われます。1915(大正4)年、一時帰国の野口に対し済生学舎同窓生による歓迎会も開かれております。その際、野口は、多くの野口英世語録と揮毫を残しています。その中でも

特に印象深い言葉は、「忍耐は苦い。しかし、その実は甘い。(原典ジャン・ジャック・ルソー)」の語録と「忍耐、済生」(野口英世記念会所蔵)の揮毫であります。

1939(昭和14)年、野口記念館が設立された際、野口の知友である済生学舎同級生は、祝辞として、「野口は、官立大学でなくても、校舎が粗末であっても、経済的に苦しくても、努力によって人類のためにすばらしい研究を遺した。後世の若い人たちに勇気を与えた。」と述べております。

浅川範彦は、明治13年高知医学校で学び、その後上京し、済生学舎に入り、1年で医術開業試験に合格し、1883(明治16)年済生学舎を卒業しました。1894(明治27)年北里柴三郎所長を頼って伝染病研究所に入所し、ジフテリア血清療法の研究に従事しました。1896(明治29)年当時の最高レベルの教科書である『実習細菌学』を北里柴三郎と共著で出版しました。1899(明治32)年内務省伝染病研究所創立と同時に第三部長、講習生指導者となりました。浅川は、野口英世にペスト菌やジフテリア血清の作り方、ワクチンの基本的作成方法を教授したと言われております。その丹念に追及していく研究手法は「探偵的研究」とも呼ばれました。浅川は、北里柴三郎門下の英才であり、1901(明治34)年北里門下第一号の医学博士となりました。しかし、残念ながら、1907(明治40)年42歳の若さで他界夭折しました。北里は、この浅川の業績を記念して、「故医学博士浅川範彦君記念奨学資金」細菌学賞「浅川賞」を設けました。これは、最も古い名誉ある学術賞であり、1959(昭和34)年に「日本細菌学賞」と改称され、現在に至っております。

済生学舎と本学関連史料

本学にはスクリバ文庫があり、その由来を通しスクリバ研究の新たな知見をお話しします。ユリウス・カール・スクリバは、明治期の外国人医師としてドイツより招聘され、1881(明治14)年東京大学に着任し、主として外科学や皮膚梅毒、眼科さらには裁判医学を20年間担当しました。スクリバは、日本の外科学の父と言われ、また私生活では、日本人女性と結婚し、三人の男の子をもうけました。このユリウス・スクリバは、生前、外科学のみならず、内科学や眼科学など多くの医学書を所有しておりました。その蔵書が大正期に本学に寄贈され、現在の「スクリバ文庫」として172冊残っております。また、長男フリッツ・スクリバは、本学の前身である日本医学専門学校の子科でドイツ語教授を務めておりました。その長男フリッツ・スクリバに関し補筆します。スクリバ一家は、当時鹿鳴館やニコライ堂を設計したイギリス人建築家ジョサイア・コンドル設計の瀟洒な洋館に住んでおりました。スクリバ家の墓地は、青山霊園にあり、フリッツはそこに父ユリウスと共に眠っております。フリッツの墓碑には「日本醫科大學教師」と大きく刻まれ、さらに、その墓域の入り口には「日本醫科大學學生一同」と刻まれた石灯籠が建っております。生前フリッツが如何に学生に慕われていたかが推し量れます。また、フリッツ・スクリバは、昆虫学者でもありました。1927(昭和2)年に亡くなられた時には、その業績を讃えて、母国ドイツでは昆虫学会の学会誌に追悼記事が特集されました。

尚、済生学舎で当時使われていた教科書類の一部の長谷川泰譯述資料や篤志家寄贈による貴重な古書籍の特別展示も行いますので併せてご覧くださいませようお願い致します。

最後に、日本医科大学のあるここ千駄木の地は、ご存じのように文人が愛した町でもあります。本学の同窓会館は、明治大正期に二人の偉大な文学者、森鷗外と夏目漱石が住んだ旧居跡でもあります。明治23年に鷗外が住んだ13年後には、偶然にもこの同じ家にイギリス留学から帰国した漱石が入居しました。この家で漱石は『吾輩は猫である』『坊っちゃん』などの名作を執筆しました。この当時の建物は、現在、愛知県犬山市の明治村に移築されております。鷗外の小説『青年』には、本学の前身「日本医学学校」が出ており、また鷗外の長男の森於菟は本学前身の日本医学専門学校の解剖学教授を務めておりました。さらに夏目漱石の書簡には、済生学舎創立者の「長谷川泰」が登場します。鷗外・漱石旧居跡には、ノーベル賞作家川端康成の題字が刻まれた碑が立っております。これは、康成の父が、本学前身の済生学舎出身の医師であったことによるものであります。会員の皆様には文化の馨り高い千駄木の地での、第121回日本医史学会学術大会を成功裡に終えることができますように、ご協力を心からお願い申し上げます。